

## 駅空間の視覚的空間情報による定位性に関する研究

岐阜大学 ○田中 利明 出村 嘉史

### 1. 研究の背景と目的

近年、都市化の進展に伴い、都市空間が複雑化し、人の移動も増加した。駅に注目すれば、旅客が駅空間内を歩行する際に自分の位置や目的地の方向が分からなくなる状況があるにも関わらず、未だ解決すべき重要な問題として取り扱われていないように思われる。文字やサインを頼りに進まなければならないことの多い現代の公共的な巨大施設において、空間そのものによる視覚情報から定位性を得ることは出来ないのだろうか。

本研究は、実際の駅空間において、旅客が自らを定位できるような、分かりやすい空間構成の特徴を明らかにすることを目指す。

### 2. 研究対象と定位性

#### (1) 本研究における定位性の定義

一般に日本の駅空間では、多様な交通施設との乗り換え地点を互いに集積させることが重要視されてきた。そのため歩行する旅客にとっての連続する空間に対しては、深く考慮されているとはいえ、施設の拡張に伴い、乗り換えのための移動経路が複雑化し、辛うじてつながっている程度のもも少なくない。その結果、旅客は駅空間で迷い不安になったり、あるいは迷わなくても誘導に従うのみで周囲の風景に目をやることもなく、盲目的に移動することになってしまっているように思われる。

このように旅客の定位性が奪われてしまっている状況では、都市空間へ導入する拠点としての駅の立場を失わせ、来訪する旅客は、そのまちがどのような姿をしているのか理解することが困難である。そこで本論では、旅客が駅に降り立った際に、たちまち空間定位を可能とするような駅空間の構造を考えたい。

空間定位とは、対象あるいは自己を空間に位置づけて知覚することであり、移動する動物にとって重要な能力の一つである<sup>1)</sup>。ここで述べる定位性とは、自分の周辺の空間を把握して、今どこにいるのか認識している状態をいうこととする。

#### (2) 駅空間における定位の条件

駅空間において定位性を確保するにはどのよ

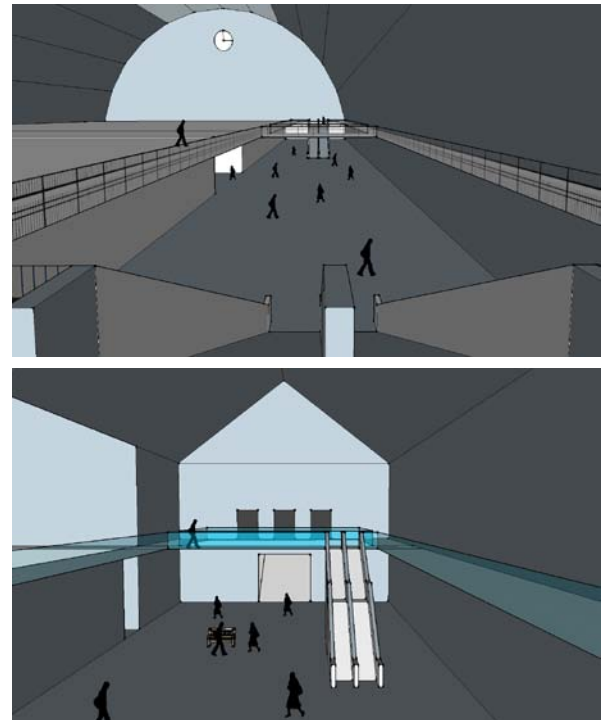


図1 駅舎内の俯瞰の空間

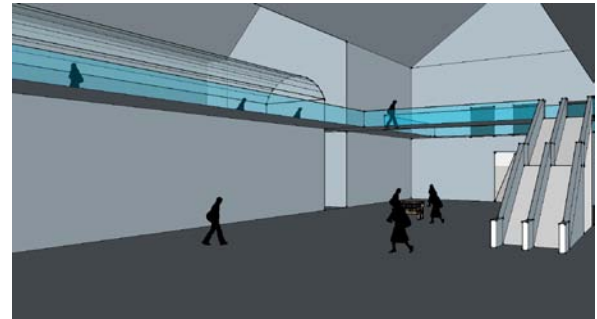


図2 駅舎内の仰視の空間

うな条件が必要だろうか。駅舎内のスケールから都市のスケールまでさまざまなスケールがあるため、段階別に考察する。

1) 直接ホームや改札などを視認できる。

初めての空間を認知するために自らの立場を明らかに既知な場所と関連付けることが必要とされる。行き先の目的として、あるいはそこへ至った最後の手がかりとしてホームや改札を視認できるというのは未知の空間の中に投錨する確かな場所として重要である。

2) 駅前広場を視認できる。

また駅前広場は次の移動に対して確かな場所として認識される。

### 3) 周囲の人のアクティビティを把握できる.

駅空間や都市空間において人の活動を把握することは、その空間の本質的な機能を理解する上で重要である。旅客はその空間の中で仮想行動をとり、次の投錨地点を探す。

### 4) 市街地の構成とそこにおける駅の立地が理解できる.

駅空間、駅前広場を通じて、都市を抜ける視野が確保され、都市のもつ地理的構造や、基本的な都市構造が把握され、その中における自らの位置づけを知ることは、決定的な定位を与える。

## 3. どうすれば定位性が得られるのか

空間的に自らの位置を直接把握するような視覚のあり方に着目し、可視不可視という観点から考察する。

### (1) 駅舎内の定位性

鉄道が上を走る駅舎内では、天井の高さが低く設定されたり、柱が多く必要になるなどの理由により視界が狭くなることがある。さらに、旅客に上下移動が強いられる場合も多い。このような場合は、旅客は定位性を失いやすいが、そのような場合でも図1のような吹き抜け空間を創ることで、俯瞰して全体の空間を把握しやすくなる。また俯瞰する場合も、下から通路ということがわかるようにペDESTリアンデッキ等を用いることで、空間を把握しやすい(図2)。

### (2) 駅舎と駅前広場の定位性

#### (a) 駅舎入口と駅前広場にレベル差がある場合

この場合、旅客が広場に降りるためには、垂直方向の移動をする必要があるため、俯瞰して広場の外を含めた空間を把握することができる(図3)。そして、屋外階段の踊り場は、通りを見下ろす「テラス」にもなる<sup>2)</sup>ことから、広場に接続する階段の踊り場を工夫することで様々な視線を生み出すことが可能である。

#### (b) 駅舎入口と駅前広場が同じ高さの場合

壁にガラスなどを用い、壁を透かし、駅舎内部から旅客に駅前広場の風景やまちの景色を見せることで、方向を認識したり、駅を出る前から外部空間を把握することができるようになる(図4)。

### (3) 駅前広場とまちの定位性

駅前広場はまちと隣接しているので、まちへのアクセスの仕方やまちの空間を把握できる視点場が重要となる。そのような視点場は、ペDESTリアンデッキを用いることで得ることができる。図5のようにペDESTリアンデッキの先のまちの

入り口やまちの空間を俯瞰することで市街地の

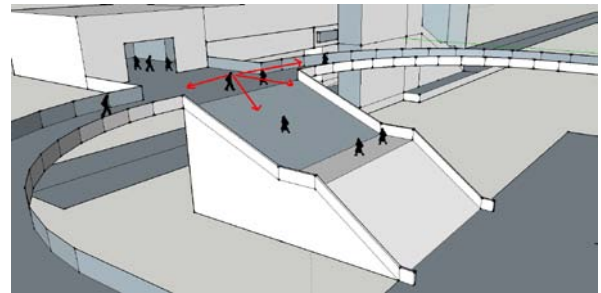


図3 駅舎と広場の境界からの定位



図4 透かしの空間

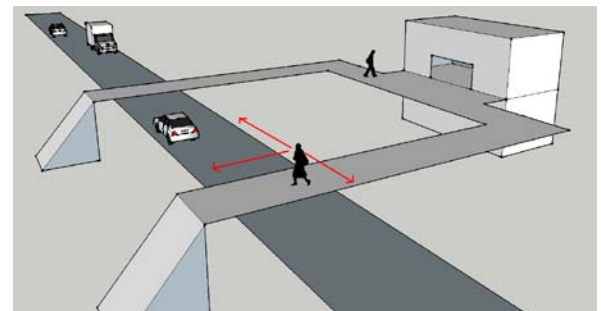


図5 ペDESTリアンデッキからの定位性

構成とそこにおける駅の立地が理解できる。

## 4. おわりに

今回は、旅客が自らを定位できるための4つの条件を挙げた。そして、駅舎内、駅舎と駅前広場、駅前広場とまち、それぞれどうすれば定位が得られるか考察を行った。

今後は、JR岐阜駅を対象にケーススタディを行い、現状の空間構成の分析、問題抽出を行い、改善策を考察する。

### 参考文献

- 1) 空間認知の発達研究会編：空間に生きる—空間認知の発達の研究，pp. 276，北大路書房，1995
- 2) C. アレグザンダー他：パタン・ランゲージ，pp. 351，鹿島出版会，1984